

新連載

日本でつくる 剣道具

—— 剣道具の製造工程、すべて見せます

第1回 剣道具づくりを日本に戻す

撮影=窪田正仁

多くの読者をご存知のように、現在流通している剣道具（防具・竹刀）の大部分は中国など海外でつくられている。一方、日本国内では伝統技術を守る職人が細々とつづけているという印象が強いが、宮崎県西都市にある（株）日本剣道具製作所では、月に400組という大量の剣道具を製造している。間違いなく国内で最も大規模で、最も多くの防具をつくっている工場である。

同社の最高経営責任者である川辺尚彦さんは、「ここが現代の防具の本物です。海外にもいいものはあるかもしれないけど、純粋な伝統文化を受け継いだのはここです」と胸を張る。

昭和12年創業 職人の技術は日本の宝

日本剣道具製作所の旧社名は多田産業株式会社。戦前の昭和12年に創業した老舗であるが、経営に行き詰まって平成23年に民事再生法を申請、その後平成26年になって川辺さんが経営者として再生を手がけることになった。

川辺さんは武道具店勤務を経て25歳で独立し、熊本市で（株）全日本武道具を創業した。全日本武道具の剣道具は「ALL JAPAN PITCH」のブランドで知られ、現在は多くの愛用者を獲得しているが、独立当初、多くのメーカーから取り引きを拒まれた中で、最初に快く引き受けてくれたのが当時の多田産業だったという。

そんな思いもあって日本剣道具製作所の経営を引き継ぐことになった川辺さんは、全従業員の雇用を継続し、現在は70名ほど

が社員パートとして働いている。また、元従業員に声をかけて、80名ほどに自分の家での作業、つまり内職をしてもらっている。

川辺さんは「最終的には、剣道具づくりは日本に戻る」と言う。中国で防具を製造し日本で販売することからスタートした川辺さんが、コストがかかる日本での製造も手がけた理由がそこにある。

「これは武道具業界の皆さんに問いかけたのですが、まず韓国に移行して、韓国の賃金が高くなってきたので韓国から中国に移りました。そして今は中国の賃金が高くなって他の国にどんどん移っています。それは、せっかく10年20年積み上げた技術を捨てていくということなんです。では次に移った国の賃金が上がってきたら、今度はどうなるのでしょうか。最終的にはアフリカじゃないか、なんて話も業界ではしていますが、最終的に戻る場所は日本ではないかなと私は思います。もっといい海外の拠点が見つかるかもしれませんし、10年後、20年後かもしれません。とにかく最終的にもう日本に戻ろうと思ったときに、日本に工場がなかったらまた1からになってしまいます。というより、今の日本の職人さん

を大切にしておかないと、そのときはもう日本でつくることができなくなっているのではないかと思います」（川辺さん）

中国などへの物づくりの移行は、剣道具に限らず多くの産業にあることで、世界的な経済の流れといえる。たとえば衣料品でも、かつては日本の繊維産業も盛んだったが、中国に移り、人件費が高くなったから次の国に移っている。電化製品やコンピュータなどのハイテク製品でさえ同じ流れをたどっている。剣道具だけが、その逆を行くことができるのだろうか。

「縫製技術ならば1、2年で製品は安定するかもしれませんが、剣道具づくりの技術は1、2年ではどうにもなりません。10年やっても20年、30年やっている人にはかわない。20代のときから働いて今80いくつかのおばちゃんお二人に、週に3回ぐらい手伝ってもらっています。50年間、面だけつくっています。武具の神様です。それに、普通の販売店の職人さんだったら、防具を一通り20年30年つくっても数としてはそんなに多くないでしょうが、ここでは面なら、甲手なら甲手を毎日つくっているから、その技術は卓越しています。だから、日本



案内人 川辺尚彦

（かわべたかひこ）（株）全日本武道具、（株）日本剣道具製作所代表取締役。昭和55年、熊本県多良木町に生まれる。多良木高校を卒業、大学を中退して武道具業界に飛び込む。25歳で独立し、全日本武道具を創業、平成26年より全日本武道具製作所の経営も手がける

の宝です。ここがなくなったら日本の剣道具文化というのは終わるかもしれない」（川辺さん）

工場での剣道具づくりをオープンに

そんな思いもあって、それまでこの工場内部はメーカーや販売店、あるいは剣道をする人にも公開していなかったが、川辺さんが関わるようになってから、すべてオープンにした。「そんな簡単に80年の技術を盗まれるようなことはない、誇りを持って皆さんに見せてあげたほうが信頼性は上がりますよ」と言ってオープンにしました」（川辺さん）



川辺さんが「日本の宝」だという、日本剣道具製作所で働く人たち。年齢は高齢化しているが、最近は地元での認知度が上がってきて応募する人も増えている。剣道をしていて高校時代に見学を訪れ、卒業と同時に就職したという人も(株)日本剣道具製作所 <http://www.budougusenmon.com/>

今は業者だけでなく、剣道をする一般の人も全国各地から多数見学に来るといいます。そんな見学者からの手紙が職人たちの励みにもなっているそう。

「お手紙をいただくと職人さんたちは燃えます。もっともっとしっかり作ってやろうなどと話しています。ある職人が『私たちにも日が当たる 때가来たね』と言った、その一言が心に残っていますね」(川辺さん)

37年の仕事をしている興和輝善さん(宮崎県伝統工芸士)が、こう言っていた。「私たちはずっと中の現場の方で作業していましたけれども、川辺社長が来られまして、会社のフェイスブックや現場の写真などで、私たち職人を表に出してくれた。そういった気持ちは本当にうれしいですね。みんなが見てくれて認めてくれるから、やりがいがある。そういった誇らしい気持ちで今現在やっております」

* さて、剣道具づくりの技術がすべてここにある、といっても、日本剣道具製作所一社だけでは成り立たない。鹿革、牛革、面金、糸、生地……そういった材料を扱う業者も不可欠である。だが、これらの業者も、同じように国内で続けていくにはさまざまな困難を抱えているのが現状だ。

「材料屋さんがなくなったら、自分たちはなすすべがない。一緒に生き抜いてきたので、材料屋さんとは共同体です」(川辺さん)

本連載では、剣道をする人たちに剣道具をもっと知ってもらうために、川辺さんを水先案内人として、今、剣道具がどこで

んなふうにつくられているのか、現状をつぶさに紹介していく。材料を提供する業者や、防具づくりのこれからの考えるために海外での実状も含めてレポートしていく予定である。



見学を訪れ、甲手を購入した人からの絵手紙が、社内に展示されていた。直接的な反応が職人たちには大きな励みになる